

可茂農林事務所の普及活動状況 令和7年9月4日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■若手農業者が直売所開設！ 八百津町新規就農者等

八百津町では、有機農産物を生産する新規就農者2名を含む若手農業者が中心となり、規模拡大に伴う販売先の確保を目的に、令和6年度から旧JAめぐみの八百津支店を借受け、有機栽培農産物等の直売所「八月だけの八百津の八百屋」を8月限定で開設した。

SNSや町・JA広報を活用した情報発信も行い、農業者自らが情報発信・収集できる場として、認知度は年々高まりつつある。

農林事務所では、関係機関と連携し、生産者の規模拡大と経営安定に向けて、直売所の運営や栽培の支援を継続する。



【豊富な有機農産物が並ぶ店内】

(地域支援第一係)

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稻高温耐性品種現地検討会を開催 管内水稻生産者

農林事務所では、美濃加茂市の水稻生産者の協力を得て、今年度から「清流のめぐみ」や「にじのきらめき」といった高温耐性品種の試験ほ場を設置し、地域における品種の特性把握を行っている。

8月8日、美濃加茂市内の試験ほ場において、「水稻高温耐性品種現地検討会」が開催され、県農業普及指導員、JA営農指導員ら約30人が参加し稲の丈や茎の数、葉の色等の生育状況を確認した。

農林事務所では、白川町や御嵩町でも高温耐性品種の試験ほ場を設置しており、地域適応性を確認するとともに、県奨励品種の決定後早期に普及するための活動を継続する。



【生育を確認する参加者】

(地域支援第一係)

■大豆の収量・品質向上に向けた取組み 白川町大豆生産組織

白川町では大豆を生産している6組織が、町内豆腐加工業者へ大豆の契約出荷を行っているが、令和5～6年度にかけて気象状況の変化や病害虫の発生等の要因により収量が減り、契約数量を達成できていないため、農林事務所では関係機関と連携し、生産組織に対して乾燥害の解消や高温対策のため、うね間かん水を実施するよう資料を作成し周知している。また、昨年発生が多かった病害虫の新規薬剤の効果を検討するため、8月からJA、農薬メーカーとともに薬剤散布前と散布後の害虫発生状況の調査を行っている。



【害虫調査の様子】

8月8日には白川町及び白川町農業再生協議会が国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構から講師を招き、町内大豆栽培ほ場と室内で生産組織を対象に大豆栽培技術研修会を開催し、講師から土づくりの必要性や降雨と収量との関係性、品種の提案等を受けた。

農林事務所では今後も大豆の生育や病害虫の発生状況を確認し栽培管理について助言を行い、目標収量達成に向けた支援を継続する。

(地域支援第二係)

■天敵によるナシのハダニ防除を実証中 美濃加茂市山之上果樹産地

農林事務所では、昨年度から山之上果実農業協同組合と連携し、露地ナシにおける天敵によるハダニの防除効果の実証に取り組んでいる。

今年度は、6月13日にハダニの天敵（ミヤコカブリダニ）製剤をナシ園に放飼し、その後2週間隔で、農業経営課の革新支援専門員と協力して、葉上のハダニ及びカブリダニ類の発生状況、その他病害虫の発生状況、下草の生物相などを調査している。

実証区では、天敵に影響が少ない薬剤を選定し、慣行防除区と比較しながら、カブリダニ類の増殖状況やハダニの被害状況を評価している。

今夏は高温・少雨が続く中、8月中旬には実証区のハダニが急増したが、カブリダニへの影響が少ないダニ剤の散布により、天敵を温存しつつハダニの密度を低下させることができた。

調査は10月まで継続し、天敵導入による防除薬剤の削減効果やコスト面の検証を行い、現地への普及が可能な技術としての確立を目指していく。



【ハダニ、天敵調査の様子】

（園芸産地支援係）